

---

# 初恋は先生

春野天使

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

初恋は先生

### 【Nコード】

N0530M

### 【作者名】

春野天使

### 【あらすじ】

緑高校二年生の泷が恋したのは、童顔教師の早苗だった。初対面は鼻血だし、そもそも生徒と先生だし。奥手少年泷と、童顔コンプレックスな早苗。なにやらちょっとおかしいところだらけの二人。果たして、この恋の行方は…？

第一話 出逢いは鼻血（椎名 瑞夏作）（前書き）

以前、某サークルで企画したりレー小説です。事情により、サークル活動が出来なくなり、サークルも閉鎖されるので小説だけいただき、もう一度投稿しなおしました。

参加されたのは、椎名瑞夏さん、汐嵐さん、春野天使、姫井星光さんです。

第一話 出逢いは鼻血（椎名 瑞夏作）

ゴンツ。

鈍い音がしたなと思うと、直後に鼻に鋭い痛みが走った。

「いつて！」

思わず声をあげてしまう。

何人かこつちを見た気がするけど、そんなの知るもんか。状況をはつきり理解したのは、それから数秒後だった。

そうだ。

俺は毎日電車で通学してるんだ。

で、今日もいつものように混んでて、ドアの傍に立ったんだよな。

そしたら背中押されて、ゴンツて…

てことは、だ。

俺が顔ぶつけたのは、ドアってことだよな。

うっわ。

見られてないよな？

見られてないよな！

恥ずかしすぎるだろ。

絶対まぬけな顔してたって。

真正面から見られてたりしたら、俺は恥ずかしさで卒倒できる自信がある！

訳の分からないことを考えながら確認した先にいたのは、少し困ったように苦笑を浮かべた…少女。

…み、見られてたーっ！！！！

ぼぶん、と顔が火を噴いたのが自分でも分かってしまう。

最悪だ最悪だ最悪だ最悪だ。

一人悶々としていれば、ここぞとばかりにドアが機械的な音を立てて開いた。

途端に、目の前の少女がより鮮明に見える。

「えっと…」

少女は小さく声を漏らしながら、こっちに近付いてくる。電車に乗るんだろう。

それは分かっている。

分かっているんだけど、なんかもう傍に来ないで欲しい。

これで隣に立ったりなりなんかされたら…。

俺の願いもなんのその。

彼女は躊躇うことなく乗り込んできた。

そしてちらりと俺を見てから、目を丸くする。

間近で見た少女はすごく可愛かった。

真っ黒で癖のない髪は腰まであって、対照に肌は雪みたいに白い。

大きな瞳はうつすら茶色がかっているし、唇は小さく桜の色だ。

すごくすごく可愛いけど…こんな美少女にあんな失態を見られたのかと思うと、余計にいたたまれなくなってきた。

「あの、その…」

桜の唇がゆっくり動く。

もういいさ。

なんとも言ってくれ。

馬鹿みたい、か？

あほ顔でしたよ、か？

次に発せられる言葉に覚悟を決めていると、彼女は鞆を探りハンカチを取り出すと、それを俺に差し出した。

…？

「鼻血出てるから、良かったらこれで拭いて？」

は。

な。

ぢ。

一文字一文字噛み締めるように、脳内でリピートする。

さーっ、と今度は顔中の血液が無くなっていく気がした。

う、嘘だろおおおっ!?

「あ、あああ。その…っ」

猛烈な恥ずかしさのあまり、声にならない言葉を紡ぐ俺を見て、少女はもう一度ハンカチを差し出した。

「大丈夫。私しか見てないから、ね」

彼女は微笑んだ。

花が咲き誇るように、可憐に、愛らしく。

下がったはずの血がまた上がってきた。

不思議そうに彼女は首を傾げる。

差し出されたハンカチを受け取りながら、ついでに少女の手も一緒に握った。

無意識のうちに、喉から言葉が飛び出していた。

「き、君どこの高校？ 俺緑高校の二年生なんだけど…」

これが俺の精一杯だった。

自慢じゃないが、生まれてこのかた彼女なんていたことが無い。

友人には怖いくらい奥手だと言われる俺だ。

ていうか、多分これ初恋だ。

こんなこと聞けるなんて、本当頑張った!

だが、心の中で自分を褒め称える俺とは対照に、彼女は瞳を伏せる。な、なんか地雷でも踏んだのだろうか。

焦りまくる俺に視線を戻して、少女は何とも微妙な表情をして答えた。

「ひかまちさなえ深町早苗。古文の高梨先生の代理で昨日赴任してきた、貴方の学校の臨時教師です」

教…師…?

さらさらと灰になっていく俺に向かって、少女は眉を少し上げる。

「私、そんなに童顔ですか？」

『そっぴやさ、高梨の代わりに来た先生、滅茶苦茶可愛かったぞ』

真っ白になっていく心の中で、友人の言葉を妙にはつきりと思い出していた。

## 第二話 先生の噂（汐嵐作）

案の定、案の定だ。

俺のクラスは高梨が古典担当なんだ！

通学の電車を降りて深町（先生？）の顔も省みずに走り出す。後ろから深町（先生……と呼んだ方が良いのだろうか）が声をかけてきた気がするが、無視と言うか見ない。てか、見たくない。と言うよりも、見るほどの度胸がない！

高校までは走れば3分ほどで着いてしまう。俺は定期券をスライドさせるように改札に通し、そこからは猛ダッシュ。目的は簡単、今日の時間割である。

今日古典があつたら最悪だ。多分まともに話が聞けなくて古典の成績はがた落ちする。と言うかそれよりも友人のバカとかバカとかバカとかつまりバカしかいない訳だが、そう言う奴らに茶化されるにきまつてる！！

顔が暑くて、それが汗のせいかな赤面しているのかはさておき見れた顔面でないのは確かだった。この状態でクラスに入りたくないのだが、ここで止まったら深町先生が追いつくかもしれない。

高校二年生の足の速さに一般女性が追いつく訳もないのだが、何だかそんな気がしてならなかった。あれで足が早いつていうのも何か変な気分がするのにな、何となく怖い。と思つて後ろを振り返つたら、案の定そこには誰もいなかった。そこで気付いた事。俺って小心者。

荒い息でそんな事を考えながら少し走ったら、高校の校門が見えた。もう少しでクラスに着くかと思つたら少し憂鬱なのが、早く確かめたいと言う思考回路が勝り、俺の足は速まった。

疲れてきた体を何とか動かし教室に滑り込むように入って、目の前に飛び込んだ大きな緑色の模造紙に書かれた時間割を見てみた。

「おはよーさん洗こう。どうしたの焦こっちゃって。あれか？ 化け物で

も見たか？」

親友の藤倉に肩をぽん、と叩かれそう言われたが、今の俺は放心状態同然だ。そのあとの彼の茶化し文句もむらがつてくる他の友人たちも見えなかったし聞こえなかった。

四時間目 古典。育ち盛りの俺には絶対に寝れない空腹の時間。ああ、神様。これは喜ぶべきでしょうか、それとも落胆すべきでしょうか？

単純に生きてきた俺は、生まれて初めて複雑な感情と言うものを感じた。

「どうしたんだよ洗。やっと救いの昼食時間だぜ？」

屋上にて、俺は藤倉と共に昼食の弁当を食っていた。藤倉はいつものようにつまらない授業から逃れられる喜びから目を輝かせている。いや、それもあつたろうがそれよりも四時間目から浮かれているのだらう。

対照的に俺は恥ずかしさと心拍数の上がりように四時間目の授業は頭に入らなかつたんだけどな！

「それにしても、早苗ちゃん可愛かつたなあー。ああ言う人大好き、俺」

くつくつ笑う藤倉は本当に楽しそうだ。それもそのはず、藤倉はクラスのムードメーカーだが教師から厄介払いされることが多い。しかしながら深町先生は今日の古典の時間、藤倉の事を「クラスが明るくなって良いね」とそれはもう可憐に笑って見せたのだ。

「そうかいそうかいそれは良かつたなあ」

「おつ。洗ちゃん嫉妬かい？」

「洗ちゃん言うな」

藤倉の頭をぺす、と叩く。たまにふざける藤倉は夕チが悪いつたらありゃしない。畜生あんな最悪な出会いをしなければ俺だって今

日藤倉と一緒に騒げる自信があったのに！！

「あ、そう言えばさ」

悶々とアホな事を考える俺に、藤倉が声音を変えて話を切り出した。何かと顔を上げれば、藤倉の真面目な顔がそこにあった。

「これ、昨日流れてたうわさなんだけどな……」

「……今日赴任してきたのに情報伝達早いなあ、お前」

「伊達にムードメーカーやってる訳じゃないですから」

あはー、とふざけたように笑う藤倉だが、何だか真面目な話らしい。ふと藤倉は言いにくそうに黙った後、あーとかうーとか唸って切り出した。

「早苗ちゃん、此処の卒業生らしいんだけどさ……」

え？ と言う反応を見せた俺に、藤倉は合わせていた目をそらす。藤倉は目をそらした後、遠くを見るような眼差しで空を見上げた。

「いじめられてたらしくてさア……」

藤倉が顔をしかめる。俺は動揺を隠せなくて、体を反転させて藤倉の方に体を向ける。

刹那、藤倉はとどめの一発を放った。

「いじめてた子、つまり主犯の子を屋上から突き落としたんだってさ」

あくまで噂だけどねと笑った藤倉の声は、冷たい風が吹いたからかそれとも俺が放心していたからか、俺の耳に届くことなく消えてしまった。

### 第三話 三度目の衝撃（春野天使作）

深町早苗先生ふかまちさなえは、大学を卒業して直ぐにここ、緑高校の臨時教師になったはず。ということは、今、二十二か二十三才ってことだ。この在校生だったのは、えっと……四年前か五年前。割と最近だ。そんな時、俺は中一か小六。緑高校は同じ市内だし、もし緑高校の生徒が転落死してたなら、新聞かニュースで話題になったはずだ。うん、俺の記憶にはそんなもん残ってないし。あの噂が本当だったとしても、突き落とされた生徒は死ななかつたんだよな。

「おーい！ 洗こ！」

俺が少ない脳味噌をフル活動させて、必死に考えをめぐらせていると、突然馬鹿でかい声が聞こえ現実に引き戻された。

「……何だよ？」

「お前、どこ行くんだった？」

「何処つて、着替えに行くんだよ。次は体育だろ」

数学の授業なんて全く頭に入ってなかったけど、確かさつき終業のベルが鳴ってたはずだ。俺はぼんやりとした頭で、席を立ったとこだった。

「はあ？ 何、言ってるの？ 今日の授業は終了したんだぜ。体育

は午前中に終わってたんだろ？」

「え……？」

ようやく我にかえった俺は、座ったまま俺を見上げてにやついてる藤倉に気付く。

「あ、そっか……」

「大丈夫かよ？ 顔色悪いぜ。そんなに早苗ちゃんのこと気になる？」

「別に」

気持ちとは裏腹に、俺はポーカーフェイスを装いながら、鞆を掴んで教室を出ていく。気にしてなんかいないさ。ちよっと考え事を

していたただけだ。深町、深町、深町なんて、ただの臨時教師の先生だし……。そ、俺とはただの教師と生徒っていうだけで……。

ゴソッ！

突然激しい音とともに、目から火花が散った。

「イテーツ！」

思わず鼻を押さえる。まわりからクスクス笑う女子達の声がした。今日二度目の衝撃。鼻血、鼻血は出てないな？ そのとたん、今朝の電車での出来事が鮮明に蘇ってきた。深町の差し出したハンカチ。深町の笑顔。深町の声。俺の頭中が深町でいっぱいになる。

深町はクラス的女子どもとは違う！ そこいらの女子高生とも全然違う！ 教師だろうが生徒だろうが、そんなことはどうでも良い！ いじめっ子を突き落としたりして？ そんなのどうってことないだろ。だいたい悪いのは向こうだ。深町は深町なんだ！ 深町は俺の初恋の人なんだ！

俺の中で何かがふつきれた。そう思ったとたん、俺は教室を飛び出し走り出していた。

『職員室に行つて、他の先生どもの前で、深町に告つてやる！』

俺にとっては命がけの行為を頭に描きながら、職員室に突進して行く。今の俺には怖いものなんてない。深町のためなら何だって出来る。俺は深町を一生守つて生きていくんだ！ 熱すぎる思いに燃えながら廊下を曲がり、目の前に職員室が迫つて来た時だ。

ガラガラガラッ！ と扉が開いて、突然深町が職員室から出てきた。

『な、な、な、何ー！？』

予定が狂った！ って言うか、深町の姿を目にした途端、俺の燃えたぎる熱い思いが急になえてしまった。効果音で表現するなら、目一杯膨らんでいたいた風船がしぼんでいくような、まさに、ふあふあふあふあふあゝって感じ。俺はとっさに身を隠す。無理だ。

授業中でさえ、まともに深町の目さえみれなかったのに……。

深町と向かい合って告白するなんて、あまりに無謀過ぎる。今だつて、顔が茹でダコみたいに赤くなって、心臓が爆発しそうだったのに。

「お先に失礼します」

そんな俺の気持ちも知らず、深町は深々と職員室に向かって一礼すると、軽やかな足取りで廊下を歩いて行く。次第に俺から離れて行く深町先生……。

いいのか？　このままで？　自分に問いかけてみる。深町は臨時教師。来年にはここにはいないかもしれない。初恋の人に告白出来ないまま、一生会えなくなってしまうかも。俺は一生、後悔を引きずって生きていくことになる。振られても良い。俺はもっと、もっと先生のことを知りたい！

反射的に足が動き出す。気がついたら、俺は深町の小さな背中を追っていた。学校を出て、駅への道を歩いて、深町との距離を一定に保ちながら、彼女の後についていく。後で冷静に考えてみると、これは、かなりやばい行動だった。ストーカーすれすれ……。いや、ハッキリ言つて、ストーカーだ。

けど、その時の俺には、冷静に考えている余裕なんかなかった。ただただ、深町の側にいたい、深町のことを知りたい、という思いだけだった。同じ電車の隣の車輦に乗り込んで、ドアの側に立つ。深町が降りたら、俺も直ぐに降りるつもりだ。しばらく、ぼんやりと電車に揺られながら、俺はある事実気がついた。

『深町はどこに行くんだろう？』

今朝、学校行くときは、同じ駅から乗り込んだはず。真つ直ぐ家に帰るなら、反対方向の電車に乗らなきゃならないんだけど、電車は逆向きに進んでいる。帰りにどっか寄るのかな？　誰かと待ち合わせとか？　もしかして、もしかして……デート！　考えてみりゃ、深町はあんなに可愛いんだ。彼氏の一人や二人いたつて、ちっともおかしくない。っていうか、いない方がおかしいというか。

告白前から、どんどんネガティブ思考が頭をもたげてくる。俺が大きいため息をついた時、電車がある駅に到着した。何気に、ホームに目をやると、そこに深町の姿があった。彼女は、俺が着いてきていることなど気づかず、急ぎ足でホームを歩いて行く。俺も慌てて、深町の後を追った。

見知らぬ駅の見知らぬ町。俺はただひたすら、深町の後についていく。一体ここはどこなんだろう？

しばらく歩いて行くと、どこからか幼い子供たちのはしゃいだ声や笑い声が聞こえてきた。見ると、通りの道筋にこぢんまりとした保育園が姿を現した。

「えっ？」

俺が保育園に気を取られていると、深町がスツとその保育園の中に入ってしまった。彼女の笑顔は、いつも以上に柔らかくなっていた。深町は立ち止まり、遊具で遊んでいる園児達を見回している。と、一人の二、三才くらいの女の子が、滑り台を滑り降りるなり、満面の笑みを浮かべて深町に駆け寄って行った。深町もそれに気づき、大きく両手を広げる。

誰だよあの子は？ まさか、まさかな……いくらなんでも、そんな訳はないだろ。必死に自分に言い聞かせながらも、俺の心は不安でいっぱいになる。そんな不安をよそに、女の子は甲高い声をあげて、深町にしがみついた。

「ママー！」

ガーンッ！ 頭をぶん殴られたような衝撃が俺を襲う。今日、三度目の衝撃に痛みはなかった。鼻血もない。けど、この衝撃は、前の二回なんか比べ物にならないくらい、強烈に俺を打ちのめした。

第四話 初恋 　それは奇跡？（姫井 星光作）

彼氏、どこの騒ぎじゃない。深町は子持ちだったのだ。

「マジ、かよ……」

俺の心の風船が急に萎み出した。ぷすう、と情けない空気を漏らしながら。

ああ……。

つい先ほど学校で誓った、深町への告白。あんな誓いを立てた自分が馬鹿らしく思えてきた。

勿論、それは彼女が子持ちだったという事実のせい。けれど、それだけじゃない。

俺は彼女について何にも分かっていないじゃないか

今日から新任した我が校の教師。とても小さくて、愛らしい童顔で、守ってあげたくなるくらいに可愛い先生。

そう。ただ、それだけ。

電車の窓に顔をぶつけ、鼻血塗れの俺にハンカチをくれた　それだけなんだ。

俺の脳内の悪魔が「お前、何に期待して告白しようとしたんだよ。バール」と鼻で笑っている。庇ってくれる天使なんて、いやしない。

「あれ……君……」

ハンドベルのような心地よい音色。深町の声だ。ポーっとしていたため、俺は園門から娘を連れて出て来た深町に気がつかないでいた。俺は即座に我を取り戻し、平然を装った。

「えっと、梶村君……だっけ？」

深町は俺に笑顔を見せた。桜色の唇が、かなり可愛らしい。俺が今の今までプチストーカー行為に勤しんだことを知れば、一体彼女は どう思っのだろう。そう考えると、急に後ろめたくなってきた。俺は本当に情けない奴だ。

「こんなところで会うなんて、奇遇ねえ。君、家この辺りなの？」

その童顔に屈託のない笑みを浮かべながら、深町は首を少し傾げた。下で娘が「だあれ？」と、深町の手を、両手いっぱいには握って揺らした。

「……………あ、いや、その。ちょっとその先の本屋に用があつて」  
咄嗟に言い訳をした。道路の遙か向こうに大手チエーンの本屋の看板が見えたからだ。

「そうなの。勉強熱心なんだね」

何を勘違いしたのか、深町は納得したように頷いた。本当に用があるのは深町なのに……………。本屋に並ぶつまらない参考書に用がないのに……………。俺は下唇を深町に分からないように噛んだ。

「あつ。とか言つてイケナイ本買おうとしてたんでしょ？」

上目遣いで彼女は言う。そして「ダメよ」と唇を窄ませた後、「ねー」と娘の方に顔を降ろした。

「違います！」

それに俺は素で否定してしまった。深町はどこまでも無邪気だった。大人の女性、あろうことか教師にこんな印象を持つことなんてきつと今の俺は普通じゃない。

「……………フフ。冗談よ。じゃ、先生はこれで。気をつけるのよ」

深町はにつこりと微笑み、至近距離にも関わらず大袈裟に手を振った。娘も真似をして手を振り出した。

まるで風が景色に溶けていくかのように、深町は俺の目の前から去ろうとした。

「さ、さようなら……………」

便乗して……………という意識などなく、俺も自然と手を振っていた。

深町は小さく頷いた後、身体をかえして歩き始めた。

何だこれは……………？ 何なんだ、この悔しさ。俺を一人残して、深町親子はどんどん俺から遠ざかって行くけれど。

いいのか、俺？

虚しくも、自問。

いや、これでは駄目だ。絶対に。

俺の今までの人生　くだらない十数年間だった。だから、これほどまでに胸を揺さぶられたのは、当然初めてな訳で……。今までは、恋？　愛？　何だそれは？　食ったら美味しいの？　そんなつまらない揚げ足取りで精一杯の、つまらない人生だった。それが変わろうとしている瞬間。それが今。

すなわち、深町との出会い

だったら、答えは一つだろう。俺も男だ。やるときはやる。少なくともこの瞬間からはそういう男になった。だから

「先生っ！　深町センセイー！！」

俺は大声を張り上げた。

十メートル位向こうで、華奢な後姿を見せていた深町が振り返る。「本当は先生に用事があった。だから、少し時間を」

深町はさぞ驚いたことだろう。ここからでもその鳩が豆鉄砲を食らったような様が見てとれた。ほんの少しの間の後、深町も俺に負けず劣らない大声で、「いいよーっ！」と返してきた。

子持ちがどうした

知らないことの方が多いのなら、知ろうとすればいいじゃないか  
簡単な答えに、今になってやっと気が付いた。そんな自分が、と  
てつもなく恥ずかしい人間に思えた。

俺と深町親子は近くのファミレスに入った。チープなこの店ならば気兼ねせず話せそうだと思ったので、俺が選んだ。娘は「クリームソーダ食べたい」とうきうきしていた。

俺たちは店の角、ソファ席に腰をおろした。俺はコーラ、深町は

アメリカンコーヒー、娘はクリームソーダを頼んだ。深町はどつちかというと、カフェオレ、みたいな感じがしていたので、少し驚いた。

「話って、何かな？」

深町は軽く笑いながら、幼げなフェイスをちよつとばかり傾けた。「えつと、その……」

引き留めたはいいが、正直策などひとつもなかった。俺は深町から顔を反らし、幾何学的な床の模様を無意味に観察。  
やばいな。緊張する。

「ママあ、クリームソーダまだあ？」と娘がままたらない発音でいう。深町は「もうちよつと待ってね」と娘をたしなめた。

はあい、と娘はメニューカタログを手に取り、楽しそうに眺めだした。彼女にとって最高に面白い内容の詰まった絵本なのだろう。

「あ……あの、噂なんですけど……」  
「ん？」

「先生つて、うちの高校出身なんですよね。それで、聞いた話によると」

「私が昔いじめられっ子で、いじめの犯人を屋上から突き落としたり話？」

「……はい」

俺がいい終わる前に、深町はいった。それから「もうそんな話が一回つてるのかあ」と溜息をついた。

「言つとくけど、本当よ？」

深町はさらりと言つてのけた。

「確かに私は彼女を屋上から落としたわ。……でも、もう昔の話」  
深町は運ばれてきたコーヒーを冷ましもせずに飲み込んだ。しかし、やはり熱過ぎたのであろう、熱っ、と舌を出した。

「ママ、あたしがふうふうしてあげる」

「ありがと。優しいのねえ、ユミちゃんは」

深町は娘　ユミちゃんの頭を愛おしそうに撫でた。ユミちゃん

は嬉しそうに、はにかんだ。

「その人は……無事だったんですね？」

「その人？」

「いじめっ子の……」

「うん、生きてたよ。死んじゃえ、って突き落とされたのにね。しょうもない傷とか、両足の骨折で済んじゃった。……あ、今は教師としてあるまじき発言だったね。さらっと流して」

「先生……」

深町は笑顔で壮絶なことをいった。きつと、自身で既に割り切っている話なんだろう。

俺はもうその件については触れないことにした。深町の過去を詮索するのは、いけないことだ。とても悪いことだ……。

「彼女、落とされた後私に何ていったと思う？」

しかし深町は続ける。

「……何て、いったんです？」

「ごめんね、っていったの。何でだろうね。私には、未だに分らないよ」

俺は生唾を飲み込んだ。

「私泣いたわ。めちゃくちゃ泣いた。それからね、彼女とは物凄い勢いで仲良くなったの。今では、そう、マブダチって感じ？」

不思議よねえ、と深町は呟いた。それからまた微笑んだ。本当に笑顔が似合うな、深町って。

「この子、彼女の子供なのよ」

「え？」

俺は一瞬耳を疑った。

深町の娘じゃない、だって？

「この子には母親が、二人、いるの。……ねえ、ユミちゃん。ユミちゃんには『お母さん』と『ママ』がいるのよねえ」

ユミちゃんは「うん！」と元気よく頷いた。

「どづいことですか？」

「……うん。ユミちゃんにとっては、私も本当のお母さんである彼女と同じくらいなんだろうね」

俺には分かった。きつと、深町はとうの昔に自覚していることだ。深町は尽くしたのだろう。いじめっ子に逆襲したのはいいものの、残ったのは虚しい罪悪感だけ。深町自身、やり方はまずかったと自覚したはずだ。

だから、いじめっ子に尽くした。現に、ユミちゃんの世話を大儀せずに行っているではないか。

逆にいじめっ子側も同じくらい、いや、それ以上の葛藤があったんだろう。こういった「いじめ」の結末もあるのか。俺はしみじみ思った。

「何か暗い話、ごめんね」

「いや。こっちこそ、何か……」

すいません、という言葉を寸前で飲み込んだ。それをいつてしまえば、危うくダンボールのように軽い人間になり下がるところだった。

「それで、話つてのは……私の過去話について聞きたかっただけ？」

「……いや」

どうしようか。

とても告白には漕ぎ着けそうもない雰囲気だ。深町は過去も含めて、複雑な女トメ

いや、けれど決めたはずだ。現に、過去の話聞いても、深町に対する想いに揺るぎはない。

「先生、晩ごはんとか色々支度あるし、あんまり長居は出来ないのだけれど」

決めた。

そう簡単には逃がさないぞ、深町。

「梶村君も、帰って勉強しないと」

「先生」俺はそういつて立ち上がった。

深町は驚き、俺を見上げた。

俺は息を大きく吸った。

「俺、深町先生に一目惚れしました」  
沈黙。

ファミレス店内の俺らが陣取るこの席だけ、時間が止まったようだった。

「え……？」

「だから、今朝のハンカチはもらっときます」

俺は机の上に小銭を出した。百九十円。すっかり炭酸の抜けてしまったコーラの代金だ。

それから、

走った

ファミレスから逃げ出すように……尻尾を巻いて逃げ出す臆病な番犬のように。

「あ、ちよつと！」

後ろで深町の声がした。

俺は、一人にやけた。

よく分からないが、嬉しかった。多分、自己満足とかそんな感じ。ファミレスの店員が驚いている。俺は「あの人が払うんで」といい、レジから飛び出した。

ああ。そうだ。

やっぱりハンカチは返そう。その時一緒に、ちゃんと告白しよう。「好きです。付き合ってください」って。ありふれた告白をしよう。今、深町がどう返事をするのかは想像しないでおこつ。

行くあてもなく、見知らぬ町を走った。

爽やかな風が頬撫で、景色は目まぐるしく変わっていく。この景色の先に、深町と手を繋いで歩く未来を見つけられるだろうか。

「あー。明日学校生き辛いなーっ！」

俺は走りながら、そして笑いながら大声を出した。初恋というのは、こんなにすがすがしいものなんだな。

不意に、ふわりとした香り。

深町の  
がした。  
健気な花のような香りが、  
風に混じっているような気

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0530m/>

---

初恋は先生

2010年10月9日00時50分発行